

Glocal Tenri

月刊 グローカル天理

Monthly Bulletin Vol.26 No.12 December 2025

天理大学 おやさと研究所 Oyasato Institute for the Study of Religion, Tenri University

12

CONTENTS

- ・卷頭言
神話の話は飛躍する
／井上 昭洋 1
- ・文脈で読む「身上さとし」(22)
明治 22 年 11 月～12 月
／深谷 耕治 2
- ・英語文献にみる天理教 (13)
『The Gist of Japan』 (3)
／尾上 貴行 3
- ・音のちから—中国古代の人と音楽 (29)
文物が語る音の世界—唐代の鼓—
／中 純子 4
- ・ブラジルの宗教的風景 (9)
アンテベラム期の米国系プロテスitanト教会による布教活動③
／中西 光一 5
- ・ニューヨーク通信 (26)
ニューヨークのホリデーシーズン
／福井 陽一 6
- ・2025 年度公開教学講座：「元の理」の
学術的研究とその新しい展開を求めて
(6)
第 6 講：「元の理」の見立て・象徴論
／澤井 真 7
- ・おやさと研究所ニュース 8
日本宗教学会第 84 回学術大会に参加
／第 4 回天理大学・マールブルク大
学共同研究プロジェクト報告／2026
年度公開教学講座のご案内

卷頭言

神話の話は飛躍する

おやさと研究所長 井上昭洋 Akihiro Inoue

神話は、それが口承される間に様々な語り手の手が加わったり、さらに異なる集団の物語が混じり合ったりした結果、しばしばストーリーに断絶や飛躍が生じる。このことは 9 月号の卷頭言で指摘したが、「話が飛躍する」という神話の特徴は、創世神話についてもよく当てはまる。例えば『古事記』においても、天地開闢の抽象的な神々の時代から、人格神であるイザナギ・イザナミによる国産みの時代へと物語は大きく飛躍する。さらに、高天原を舞台とした物語からスサノヲの八岐大蛇退治など、地上（出雲）を舞台とする物語へ、そして神代から天皇の系譜を述べる人代へと、幾つかの断絶が見て取れる。特に、神代から人代への転換は、死と再生を繰り返す循環的な神話的時間から、天皇の系譜が継承される直線的な歴史的時間への移行であり、大きな断絶と言える。

前号の卷頭言で紹介したマヤの創世神話である『ポポル・ヴフ』にも、同様の断絶が見られる。まず最初に神々は世界を創造し、3 度の試みを経て人間を誕生させる。しかし世界はいまだ不完全で太陽と月は存在せず、冥界が闇を支配していた。ここで登場するのが、球技を好む双子の兄弟フン・フンアフラーとヴクフ・フンアフラーである。彼らは冥界の神々の怒りを買い、呼び出されて殺されてしまい、兄の首は切り落とされて木の枝に掛けられ、ヒカル（瓢箪）の実に姿を変える（死体化生神話）。

しかし、その実が女神を懷妊させ、地上に逃れた女神は双子の兄弟、フンアフラーとイシュバランケを産む。2 代目の双子は父を殺した冥界の神々に挑み、自ら死ぬことで神々を打ち破る。そして兄は太陽に、弟は月に姿を変え、昼と夜、光と闇が確立して世界は完成する。このように、『ポポル・ヴフ』では、創造神による天地・動物・人間の創造を語る創世神話と、英雄双子が冥界の神々を打ち破り、太陽と月になって宇宙の秩序を確立する双子神話との間に明確な断絶がある。

ハワイの創世神話『クムリポ』は、2,102 行から成る壮大な叙事詩である。19 世紀末にカラーカウア王が公表し、それを妹のリリウオカラニ女王が英訳した。この神話は 16 章から成り、前半の 8 章は「夜（ポー）の時代」として天地と生命の創造を語り、後半の 8 章は「昼（アオ）の時代」として英雄譚や人間社会の成立、王族の系譜を語る。

前半の夜の時代では、深い闇に包まれた原初の海に珊瑚や海藻が発生し、魚類、両生類、鳥類、哺乳類と順々に生き物が生まれ、自然界が形成されていく様子が描かれる。統いて自然界を司る神々が誕生し、さらに大地の女神パapaと天空の男神ワーケアの間に島々が誕生する。ワーケアとその娘ホオホークー・カラニとの間に生まれた次男ハーロアが人間の祖となることは前号の卷頭言で紹介したとおりである。後半の昼の時代では、文化英雄の英雄譚に加え、首長の血統の起源や島々の首長の系譜が語られ、最終的にカメハメハ王家に繋がる王族の系譜が裏付けられる。このように、『クムリポ』では、生命的創造に始まり、神々の誕生から人間の起源に至るまでを描く「夜の時代」と、人間の誕生以降の文化英雄や首長の物語、そして王族の系譜を語る「昼の時代」との間に、明らかに大きな断絶がある。

1 つのまとまった物語のように見えて、神話の話は飛躍する。異なる神話がつなぎ合わされたかのように感じられることさえある。その断絶を、天皇や王家などの系譜の正統性を示そうとするような、ある意図を持った編纂・編集の産物と捉えるのか、それとも神話本来が持つ特性と見なし、例えばそこに自然から文化への転換といった構造的な節目を読み解こうとするのか。歴史の検証を重んじる実証主義か、物語の構造を読み解く構造主義か——どの視点に立つかで、神話の断絶についての解釈は異なってくる。